

を見るに、利長卿に奉仕せる板津了甫の次男にて、利常卿に奉仕せる板津八兵衛の兄なり。諸士系譜には、板津檢校は陽廣公十口を賜はり、延寶七年歿すとあり。されば越後山の下にて、富田右衛門が靈と夢中に對話せしも、延寶年中の事なるべし。享保録に、板津檢校は歌學にも長じ、連歌も能くす。小松の能順も若き頃指南を請けたりと見え、新撰百人一首に、

板津不守一

法の水すめる心のたのしみや

まつさき立ちて夢に見ゆらん

右板津不守一は板津檢校と同人にて、此の歌若しくは富田右衛門が事をよめるならんか。

○鬼川之橋爪喧嘩傳話

三壺記に云ふ。寛永七年六月下旬の事なるに、前田孫四郎殿御子息肥後殿は、利家卿の御孫にて、及びなき御一門中にも、殊に崇敬せられけり。いまだ若年の時分なれば、ちやんふ彦右衛門・高昌又八は朝より罷越し、晝時分に成りて、石黒權左衛門・神戸加助・桑嶋藤右衛門兄の治右衛門方

へ人を遣し呼び寄せられ、夕飯も急ぎ申付けられ、飯後になれば何れも同道し厚川へ出で、中村の淵にて水をあび、未の刻に歸らる。法船寺町は、其の時分いまだ川除にて、其の外には家もなく、皆河原なりけり。富田右衛門佑の前なる橋まで出づる間は侍町なり。川除の際に坂部次郎兵衛、其の次に水野小兵衛、鬼川の際に村瀬九右衛門也。坂部次郎兵衛向に内藤助右衛門、其の次に外科の不亂坊、村瀬九右衛門向に辻助左衛門と不亂坊との間に横井清右衛門、鬼川を越えて橋際に松江次郎兵衛、向は神戸藏人也。惣構の方は横田彌五兵衛、山本治部向は半田五郎右衛門、如此に有りけるに、肥後殿、鬼川の橋ぎはへ何れも同道し行懸りける處に、村瀬九右衛門惣領四郎右衛門、坂部次郎兵衛惣領市郎右衛門、兩人連れて鬼川の橋へ行懸り、坂部市郎右衛門橋爪へ渡り懸り、肥後殿も渡り懸り、橋の眞中にて鞘とさやとはつしと當る。肥後殿扇子を取直し、市郎右衛門の肩をひしとせがれめとて打たれければ、市郎右衛門刀を抜き、心得たりと云ふ處を、石黒權左衛門市郎右衛門の後をかき抱き、橋より道へ押しおろす。

肥後殿家來川へ飛入り、橋向ひなる村瀬四郎右衛門を取りこめたり。四郎右衛門は刀をぬき、肥後殿橋を渡り道へ下らるゝを待ちかまへたり。取廻されてたゞき合ひ、大勢なれば四郎右衛門は松江次郎兵衛前にて討留むる。坂部市郎右衛門は石黒權左衛門にかゝえられて、刀を振るに付いてつき放す處、何れも寄合ひ打留むる。其間に肥後殿は何れも引包み、半田五郎左衛門の門へ引入り、裏づたひに富田右衛門佑方へ入り、表門へ出でられ、高岡町へぞ引取られける。村瀬九右衛門は其時湯殿に行水して有之處に、四郎右衛門乳兄弟佐太郎と云ふ者走せ入りて、四郎右衛門様こそ喧嘩被成討たれ給ふと申しければ、九右衛門聞きて、浴衣の上に手拭帯して、長刀おつ取つて懸出で、せがれ討たして何方へがし可申とて追懸ける。山本治部前にて追つき、肥後殿家來共立歸り追つまくつつ戦ひけるが、肥後殿歩行之者二人討たれ、草履取跡に下り、後より九右衛門がよわ腰を切る。九右衛門長刀取直すかと見れば、此の草履取胸元より首筋半分か切り倒さる。肥後殿歩行頭市川六兵衛はしばし戦ひ、まつかう切られけれども、九右衛門を討留め

たり。其時坂部次郎兵衛は宿に有合ひけれども、程隔て、聞くや否や鎧を以て出でけれども、はや何れも引入り、見物の人のみ多し。是非なく妙慶寺へ引込み、法舛して上方へぞ登りける。村瀬九右衛門次男忠藏、十六・七歳の頃也。是非に出でんと刀をおつ取り出でけるを、母乳母などが引留め、其の弟亂助は未だ若衆にて十三・四也。村瀬四郎右衛門乳兄弟佐太郎は、少し手負ひけれども、軽くして別儀なし。追付き江戸へ言上有りけれども、肥後殿手前に別儀なし。去れ共敵討もあらんかと、一代氣遣ひ油断なかりけり。肥後殿後には三左衛門と云ふ。保科肥後殿に指合ふ故也。村瀬九右衛門が妻子は江戸へ引越しけり。森川出羽殿姪なれば也。二男忠藏は水野甲斐守へ有付き、弟亂助は旗本衆子小姓に出でけるが、並びなき若衆にて殊之外いつくしく、見る者毎に執心し、引手数多に成りければ、申分出來し、亂助共に淺草にて討死す。此の由兄忠藏聞付け、相手を討取らんとて走せ廻りて渡合ひ、柗町にて討死す。此の事を、四郎右衛門乳兄弟佐太郎弟石松といふ者、加州より召連れられ、兄弟の果を見て金澤へ歸りて語りけり。村瀬四郎右